

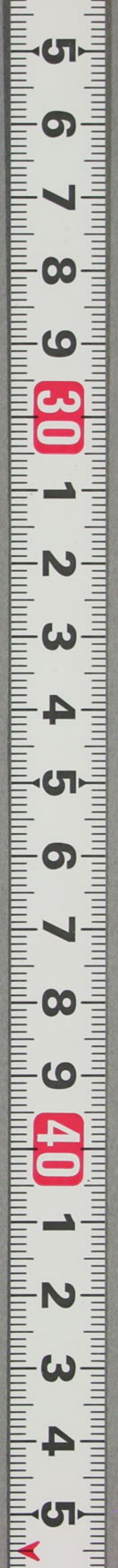
滑誓

夢輔禪

編

下

^ 13
3761
6



意をあらわくくませと教風景との目の貴山
 やくきすうさへ左橋ありも虫めあたまひ子私
 どもハ風雅と風流とゆりりかわくゆけまをんおらん
 さん方のお供おあうちりて歩行ゆんぶらう雅人の様
 似とて些とくその気あかりさうまゆんでぶらうまひト
 男ハ筆中ぶらんあわらさうまゆりてあつ野ぶらうこのふらゆり
 公の都とらハまゆらうゆりるんぶらう教とゆりあつまゆりまゆりまゆり
 へそまゆりこのふらゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり
 ゆあゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり
 ちやちやわくくませとくまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり
 ちやちやわくくませとくまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

本が丈木でゆでぶらうまひ 見一奥久の牡丹ハ名まひ
 ちやちやわくくませとくまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり
 他かちのてあて見物がまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり
 化のひんまりあつぬ所を穿鑿して見るのがお方の様
 そりやち牡丹ハ限らぬがけ節ハ見くらぶ牡丹との思ひ
 付ぶらうとんか所まゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり
 感心でぶらうまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり
 性まゆりも雨でも降らて淋ハ目まゆりまゆりまゆりまゆりまゆり
 性まゆりも雨でも降らて淋ハ目まゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

落ちゆくサどふも風流の朝晩の茶も出さず行かす汁も
 煮詰る時分沃度も破く刀で讎このがおまき菜
 漬もわくわくして化がうらちなる所がいとありやるゆんご
 くらどもも風雅ごんごん眼外外ごせせん字 風いのみ
 次もわが俗をとるまこと行が雅サ貴公も此後客の突
 合つて言葉でも氣を付らかり世間限るまきのの喜受の
 人は比まるふやといふぞ今も今つらん眼らんぞといふが白眼と
 りのくひるが今らん眼といふ六圓わく ぞ一 登老眼や猿眼の

類と人遠ひまはる 用一イサ眼もすわ入捺落ご地獄の
 一々金輪際とのみの地の厚まは一百六十万由旬サ金
 輪捺落の底まはとの根もげと俗よりこのい
 くらよく人が金輪まるとごの七子ごのこのひまはるす
 且七子ハ絹布も彫物細工の納子とのふも突のふり
 ぬいゆきまはるのいご ぞ一 ぞふも念入谷の免子母神で
 ぞふりまはるふへはま妻娘とひてはごふでぞふりまは
 風林とりのぞらまはる ぞ一 ぞふり我と後とら思ふとまはる



長力潭二編下



夢田言二編一

獲をアお圓なせ植平へ女粧の一件で掛合ぬゆ
 りの程言の筋七思ひど 眺素よおひ敷重頃けそ
 りのので一歩のきく一歩の使く浪々冷々と云出落
 道具ハ橋の釣枝満用こ入相の鐘ボラうくと
 花がらうくちりうくとや小田の蛙ハ啼愛とびく
 向のりこあや一は二階づりの障子のうちを風琴の
 音グコロシキヤンで糸唄の風あつて圓ゆるとりのま
 かりし那のつおで子白鷺あう種ど小首傾け二の

是をふく心の内ニ思ひ有る人の形並ニ晩を
 であれくと八希と糸が恨の歎納とふまうで
 ト中培ぐと歎の羨れをとおまつ中とじと
 十三廿ごまうて聞え練さやの尻尾端打て香
 舟の傳の仕と云仕打で突倒の色男廿アま公
 そ素面でうらまうする一そこが意氣で五
 でお教とびか子一庭子情の有男廿所で搦つく
 けく一越方ハ未を考う杯一歩ハあがら教

ても仕方がハハるめいぐそつとぐ 泣く泣く子用次
 せ酒醒る膝滅放心歩行境の中やと月ハむら雲ハ
 霞をまて暮らる波の音きくが物まきま露をふ
 かりて来ると榎のほの枝の枯草をまきましくと柳を
 めると出さる男あつま出し枝けの向へまきまぐうと
 言はまて思ひまきま愛の人影ゆらふと六でまきん玉が身柱
 まをつら上りてびらくりサ ぞ一モシ其梅がうらひとひ子
 風ハ折で逆剥り子 垂ハイエサまらう齊危ぶま野良が頭ハ

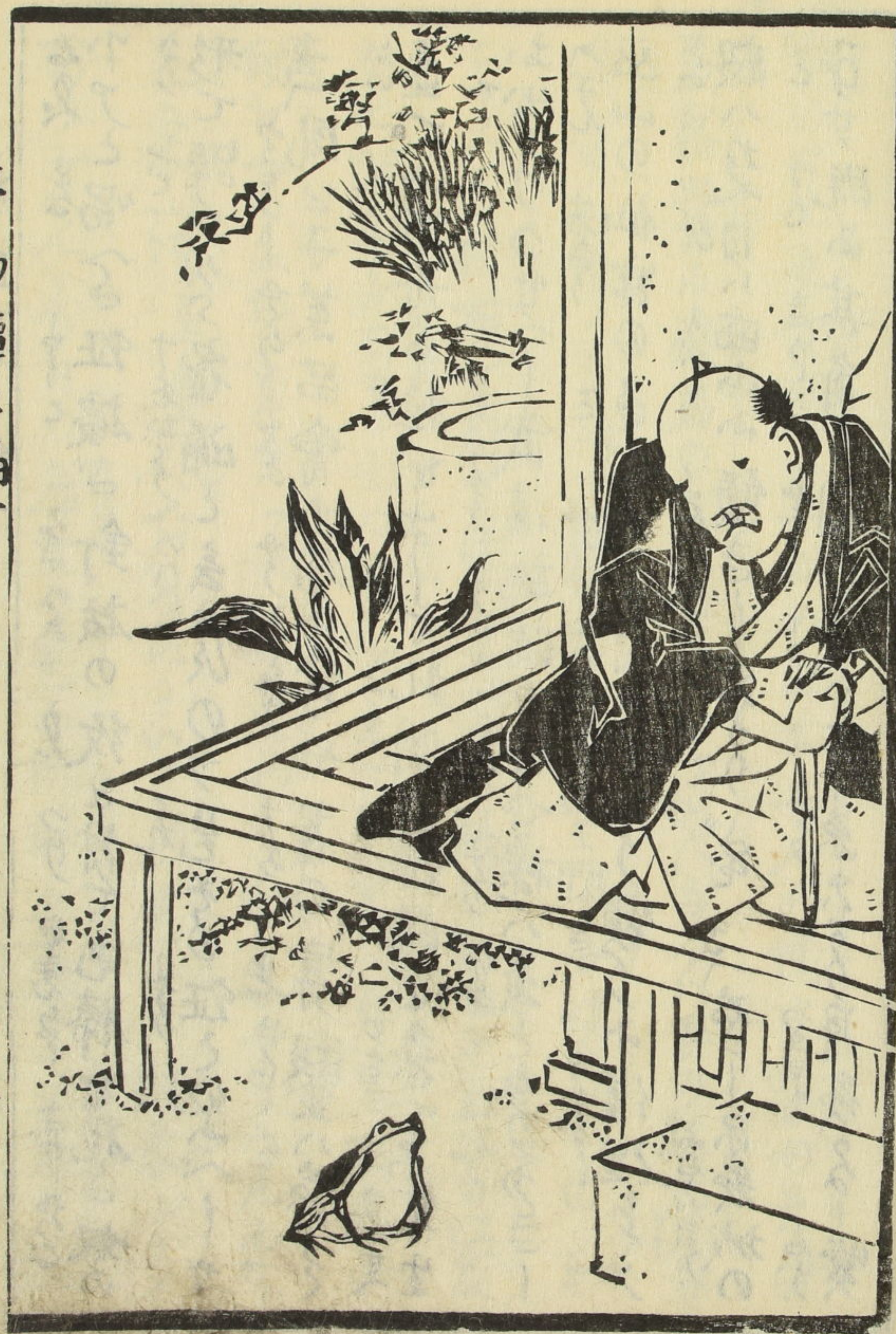
着るがの木綿衣装で某ハ扇が谷のゆ葉とらりり
 たりけ二月やど爰の道あまよりて屋敷への道がたね
 案内せよとぬきまいどまて 風ハ丸で発狂る子 垂ハま
 ちても圓丸案内とらと廻りて放さね人らりの面
 皮で扇が後まを連てはつて中りサそのつが丸腰の町
 人の癖におくへんで妙なる中りサどふまるくと屋敷の門
 糸で見えて居ると玄関らびりめりると大勢出で
 乳ハまきまサ 梳め魅ハまきまきりまきまきりまきまきり

蛙の物トのひまきころあらん 風ハも言は蛙の姿グ
 喧しひ 三ハエサ蛙のぎやてくも 適園バ風雅と意
 きととひひまんが啣くしき出の姿サ 全体鶯と蛙ハ昔
 多歌人の色ニ物サ貫之も古今集の序にも花鳥味
 鶯水ハほひ蛙まぞりぐさう歌を續ぎらんと書れま
 ず鶯ガ歌と孫どとりひるを閑さるもな一法ハ花経
 と啼の毛経漢考と号しとひ説ハは是とも別して
 蛙の孫哥をどハ証とまき考る一サ子 鶯の表徳ハ

経漢鳥子 風ハ表徳とひのよサわ入異名サ
 きさう子教常をどハかんとうの表徳をさうの芋垣
 とぞもまひまひと思ひまき 畜ハ歌字の喻サ べそハ歌
 字ハ考らううあうり也ぶが鳥ハ常ハかんが鳥でも
 亮遠のこと思ひまき 風ハ往古の聲ハ初学院の
 蒼蒙末を辨るとひも書を蒼が續ご伏よやあ
 ぬサ 三ハまハ蒼とのひハ下僕のお語で賤い下初を字
 文を聞られととひるサ子今の蒼踊とひる別ひる

夢田記二集

七



庭前の蛙
雅客
義論



園の夜はよきまをり月夜くるとりふか廓の金盞を
 寝とくとありやうすくは掃がうぐひしのトバ論も
 何もむらうふらふらふらよきまの園の夜でも月夜の如くと
 銀盃をひらきまをりまをり廓の近辺の回南や銀盃
 洗ひ橋をぞふ居るまをりの友達の如くと居るまをり
 一統をんまののぞくまをりまをり廓の文句杯は
 狂言作者がまをり廓の金盞を賞とくとおめで書
 大まをり了第遠の其角ハまをりまをりまをりま

せん出まをりも不絶まをりの文句でやわまをりまをりまをり
 一の夜もまをりまをり月夜と直一とゆふの作の
 まをりまをり遠の極意をまをりまをりまをりまをり
 けり風雅も意味もまをりの発句にまをり晋子の迷案も
 まをり園の夜もまをり月夜の極と寝るまをりまをり
 まをり月夜のまより兩國の遠くハ月夜まをりまをり
 如く園の夜ハ兩國まをり月夜まをりまをりまをり
 北六教もその通りまをり晋子ハまをり能人まをりまをり

悟さとうの句くむらりゆくさ廊らうへ入いりるの六月つぎよ表よもも周路ちうじふはららふ
 所ところありととりりひひををりりんんととの月表つきよの發あららるるゆゆの月表つきよ
 くるトとももちちううるるハハ 様々なるもの類を三さん段切だんぎれの格くなりり「書よ
疑せあると書せると中をの申のまに書くむむと書くひひののへへるるトトひひもも三さん字切じぎれととりりどども
るの同格のてふとるりんと是えむむとと書くむむとと書くむむ晋しん子しの意い味み
深長あるを俳諧はいかいの先せん生せいがが了りょう第だい遠えんひひるるととハハ也や
氣の毒塊の頭でごごづづりりヤヤハハトト ゆゑ助とごづのるまのめあり
思好楽安「俳諧はいかいごごらんらんせせんん一いち言ごんももねね入いトト ゆゑ助とごづのるまのめあり
もたされて

ろん 蛙つゐ「岸ぎしごごうう面めん白はくくももねね入いおお影かげづづ其き角かくと名なをを付つけけるる
たるハ男娘の其き角かくとと晋しんととりりのの格くでで晋しん其き角かくとと号ごう一いち室しつ
晋表とりのハ米まい元げん章しやうがが現げんとと得えてて室しつ晋しん表ひょうととりりのの文ぶん
ト鑄ちゆうててひひりりけけいい苗めう字じのの室しつ井けいとと晋しん子しととりりのの号ごうふふ
昭ひひ一いちとと室しつ晋しん齊せいととりりのの別べつ号ごうをを付つけけととヤヤせせるる周ちうのの
表④ととりりのの格くををてて遠えんひひのの月表つきよのの句くをを採さいずずるる文ぶん
盲のの俳諧はいかい師しででももひひりりままひひままのの格くをを採さいずずるる文ぶん
ごづづりりままひひるるおお書かせせるるせせんんままややアアハハハハトト ひけ連れん中ちゆう

奥おく入いりおろし酒さけ肴あじも最さい茶ちやより来きりてあるるゆゑ
 まが一杯いちぱいと酒さけ壺ひやうとともむ種たねく蛙かと義ぎ論ろんせし小こ夏なつ
 助すけハあふぬりてむぎやうくくトひまきうくくまこもむ
 ても蛙かの面おもて入い水みづあてあやうくくまじく私わがとも思おもひむ終つひ小こ
 三さん性せい庵あん酒さけ札しやくの癖くせあるゆゑ蛙か小こ言こと負おさ直ただなる履はき後ご
 五ご蛇へびととも人ひと来きり蛙かと一ひと吞のふさせんといひまきける更さら
 詮せんるまきりりといふ義ぎ助すけハ魂たまと戻もりけり
 此こゝ後ごハ滑な靴くつ音ね中ちゆうあてハ婦ふ女子じよハ懐なつ小こ供たねて履はき音ね

けしきともるま初はつ編へんの画ゑのりう一ひとれはまきくふ
 とまきて捨すておとすまきまき三さん篇へんにハ変かて理り屈くつたるる
 りハ載のむばまぬ草くさ子こと笑わらひある佳よ境きやうあり
 綱なまもあづり
 ○義ぎ助すけの骸か小こ蛙かの魂たま送お入いりゆゑ只ただ置おけにけむ
 川か端はとけけ色いろとも長ながく眼まなこ中ちゆうなる人ひと通とほり多おほき所ところ
 出いけまき登のぼりまき小こ橋はしの被かとり水みづの中ちゆうへ飛と込こんとまき
 所ところと往むか来きの人ひとうらより抱かかりてまきまきどろのお方かた

ちやちや知らんが身を投て死ねる氣にやあふひあ房
 ららるるりやましく待りまよや死んで見いあまへ命が
 ありやあひあア様とも控合トヤサテ侍んせト
そのうち一人は二人も近所のものもあつちちち
 よりいなるひまりとゆめあゆめとてあまへつち
 見まばまよごの巻ひ
 體で死へんと覺醒するのハよりくゝなるひごらうがあふら
 達が目あうらちやア放ト敷まきるものりア欲をまね
いふうていをむぐくゝなるりあちやアコらうねんハテ「さう
 ちやちやの死で花実ハよう咲まやせぬそへ寂ト思案

仕て見やあやまるとア言死んでみるやいふやうと云い
いふ
 ちやちやいふせんがナをまよでも死ねがあひうコサの利いナ
 るいでいまうねばアア唾トヤぞ人唾るらるらふふいけと
いふ
 言いこをまらんやくいふやくゝ「こまサおらんといふ
いふ
 唾トヨ涙と流ト水の中へ送りよるるが死ぞ女出入々
いふ
 まよ義理のまね入るひでもあうう言ねけりやア裂
 ねんるゝ唾の目あ涙といふのぞそとま理ふ引ッ放
いふ
 さうとまるぜ「へんがふふカが強いこまがわんの唾の流フ



街乃橋小
 夢の補
 捨身を
 救ふ



不減の嗜好ども冷るまき 俳人の義論一七半学
へいげん しょうご せいご せいご
 よう酒代百疋の散財を醸せりこきより爰助入漫行
さけのしろ せうだい ひゃくぢつ の さんさい を じょうせい しり こきより へんすけ いるまんぎやう
 ちて福徳屋の財を貪りしも忽小不義のどがせ湯を
ちて ぶくとくや の さい を こんがり し も たちま しょうぎ の どがせ 湯を
 金をさうるふのさるまき 道せりて授る金さ
かね を さうるふ の さるまき ちのせり て 授る かね
 依の取らるる布袋和尚教諭の紙買爰ふさる
よりの とらるる ぶたい じやうしやう けんごん の かしらひ へんふさる
 ちて身三篇の翻出ま一串戯交の滑稽冊子と嬰童さるる
ちて みさんぺん の ほんだつ しま 一せんぎあひ の げきかくし と へんどう さるる
 見髪一のゆる初懲の激意さるる初懲の激意爰ふ
みかみ 一の ゆる しょちやう の げきい さるる しょちやう の げきい へんふ
 夢野譚第二編下之巻終
ゆのの だん だいに げん げん の まき しま

又布屋

本草綱目
卷之六